

■ 巻頭言 ■

新春にあたって

エネルギー・資源研究会会長
東京工業大学学長

田 中 郁 三



1989年の新年にあたり、本年が皆様にとってよい年でありますよう祈念しつつ筆をとりました。

昨年の日本経済は期待した以上の好調を続け、経済成長率も予想していた4%をはるかに超す勢いで推移しました。過去にエネルギー需給見通しを含めていくつかの日本経済のシナリオが画かれてきましたが、幸いなことに日本経済は標準、グレイではなくローズシナリオの道を歩んでいっているように思われます。

大学の理工系におります私共にとって研究を進め、人材を養成していく分野として従来のディシプリンの分野と平行して次の4つが大切であると考えます。エネルギー、情報、材料、バイオの4つですが、最近の大きな特徴はこれらの分野がおのおのの独立に進んでいるのではなく、互に深く関係しており、例えば情報とバイオの間でニューロネット、ニューロコンピューターからバイオコンピューターと発展する上での協力は極めて密接なものがあるといえましょう。当研究会が過去に行った講習会「先端技術とエネルギーシステム」の内容もまたこれら分野間の学際的研究の問題についてでした。

国際的な化学者の集まりである国際純正応用化学連合 (IUPAC) が1973年の石油危機にあたって、この人類の危機をのりこえるために化学と化学技術をいかに役立てていくべきかという立場からケムローン (CHEMRAWN) を設け活動を開始しました。その第6回世界会議が1987年に東京で開かれました。そのなかで新エネルギー技術開発と材料といった課題が1つの大きな中心となっておりました。21世紀へむかって新エネルギー技術は如何にあるべきか、またどう切り開いていくのかという活潑な議論がなされました。そのときの私の強い印象は次の3つに集約されます。

第1はエネルギー問題は今後多様化の方式の適用によって解決される。第2は新エネルギー開発は例えば原子力発電、MHD発電、太陽エネルギー等々どれをとっても基礎的な研究から積み上げていくもので、そこから今迄予期しなかったシーズが必ず見出される。第3は材料、バイオなどの研究の役割はエネルギー問題を解決するのに極めて重要である。

私は新年にあたり、エネルギー・資源の研究が幹となり多くの分野の花が咲きほこることを期待しつつ筆をおきます。